ISSN 2185-341X

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

縄文時代初頭の移動とルートについて…… 重田　勉（1）

近江地域のカマド形土器
－渡来系集団の動向把握にむけて－ …… 辻川 哲朗（6）

出土文字資料に近江古代史を求めて
－付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」－ …… 濱　修（18）

正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…… 小松 葉子（26）

奈良時代の地域開発と神社本殿
－蒲生野・金貝遺跡の調査成果から－ …… 中村 智孝（39）

近江における瓦器の基礎的研究…… 堀　真人（50）

安土城の空間特性　―安土城は神社だ― …… 大沼 芳幸（67）

高島郡における山城の築城画期 …… 小林 裕季（75）

将棋史研究ノート8　―歩兵の存在感― …… 三宅　弘（84）

研究ノート　近代化の痕跡
―彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物― …… 小島 孝修（89）

琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
―滋賀県の遺跡における古生態学データの集成― ……
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 眞司（97）

30

公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2017. 3

高島郡における山城の築城画期

小　林　裕　季

１．　はじめに

高島郡内では、平地城館や推定地を含めて87か所の城郭が確認されている。高島郡では守護大名である六角氏や、京極氏、浅井氏といった有力な武家勢力の本拠ではなかった反面、その影響を受けつつも、織田信長による本格的な近江への侵攻がはじまる戦国時代末期までは、在地の勢力が突出することなく割拠して高島の地を治め、城郭を築いていく。本稿では高島郡における築城に至る経緯を整理し、その状況と要因について考えてみたい。

２．　高島郡の在地勢力(1)

高島の地は、嘉禎元年（1235）に佐々木高信が田中郷の地頭となり、鎌倉～戦国時代末にかけてその一族である「高島七頭」が割拠した。「高島七頭」と通称される高島氏の庶氏家は、惣領家の高島（越中）、田中、朽木、永田、平井（能登）、横山、山崎の家々に分かれ、鎌倉時代には「在京人」、室町時代には「奉公衆」として幕府に直属する独立的な勢力であった。文明年間（1469～1486）以降には「同名中」を形成し、共同して関を設置するなど、連合体として地域支配を行っていたとされる。天文年間（1532～1555）になると、越中氏、田中氏、朽木氏が台頭し、越中・田中両氏は六角氏方へ、朽木氏は将軍方につくこととなる。なお、天文15年（1546）の足利義輝の元服、将軍宣下の御供として、越中氏千余人、田中氏六百余人を出しており、これだけの軍勢を動員できる支配力をもっていたことがわかる。さらに観音寺騒動により六角氏の勢力が弱まる永禄年間（1558～1569）には浅井氏と同盟を結ぶようになり、織田信長によって高島郡が攻略される元亀年間（1570～1573）頃まで存続したとされる。

一方で、高島七頭以外の在地土豪の存在も知られている。室町幕府の政所執事伊勢氏の被官であった海津衆（饗庭・田屋・新保氏）や、琵琶湖の制海権の一部を握っていたとみられる林氏、出自や詳細が不明な点もあるが日爪氏や山中氏などが挙げられる。また、保延４年（1138）に山門領の荘園として成立する木津荘（のちに饗庭荘）の代官として、永禄年間（1558～1569）には吉武壱岐守の子息が「饗庭三坊」と呼ばれ、饗庭の村々に居住している。

寺社勢力の動向をみると、高島郡をはじめとする湖西地域では元は天台宗であったと伝える寺院が多く、延暦寺やその関連寺院が荘園支配などに深く関与している。寺社勢力によって築かれた山寺の存在は大きく、その後の山寺を介した築城の動きについて筆者も検討を加えている(2)。そこでは15世紀後半頃から衰退する山寺に代わり、16世紀中頃から元亀年間頃にかけて城郭化が進むが、前身遺構を否定することなく漸次的に整備されていったと考えられる。高島の地には衰退しつつも依然として寺社勢力の影響力が残っていたとみられる。

３．　高島郡の主な山城（図１）

高島郡の平野部には、在地有力者の平地居館の痕跡とみられる区画や堀、土塁などの遺構や、あるいは城郭に関連する地名や伝承地が残るものがある。各地に在地有力者が存在していたことは確かであり、本格的に山城が築かれる以前に、先行して有力者の平地居館が築かれていたことが想定される。しかし、後世の埋没や削平などの理由により、現況では詳細が把握できないものが多い。また、平地居館は現在の集落内に重複する場合が多く、城館として機能していた時期の様相を知ることは困難である。これに対して山城は、築城後の整備拡充や改修の事実は認められるものの、城郭としての役割を終えた後の改変の度合いは平地居館に比べて少ない。

ここでは山中に遺構が良好に残存し、且つ文献史料等からある程度の動向が判明する、以下の７つの山城を検討対象として取り上げる。まず各城郭の概要をみていきたい。

(1) 田屋城〔高島市マキノ町森西〕（図２）

マキノ高原と続く稲山丘陵上にあり、尾根の先端部に立地する。城跡からは、眼下の越前へと通じる七里半街道をはじめ、高島平野北部を一望できる。城主は在地土豪である海津衆の一人、田屋氏と伝えられる。田屋氏は浅井亮政の娘婿として縁戚関係があり、天文年間（1532～1555）以降に浅井氏の被官となったとみられ、浅井氏の高島進出に大きな役割を果たしている。また、越前朝倉氏本拠の一乗谷朝倉氏遺跡からは、「御者多屋どの」と書かれた木簡が出土している。

田屋城の主体部は五つの土塁囲みの曲輪で構成され、主郭に開口する虎口は内枡形を形成する。城の背後は大規模な堀切と連続する竪堀を設け、前面は竪堀を主として防御を堅固にしている。

田屋城主体部から谷を挟んだ北東にある尾根は「馬かけ場」と呼ばれる緩斜面が続き、出曲輪（図２右上）が築かれる。クランク状に屈曲する横堀と、その内側に土塁を設けて区画し、横堀や東側斜面に横矢がかかる構造である。『鹿苑日録』には、天文７年（1538）に当時六角方であった高島七頭が海津方面に出陣する中で、浅井方の田屋氏が

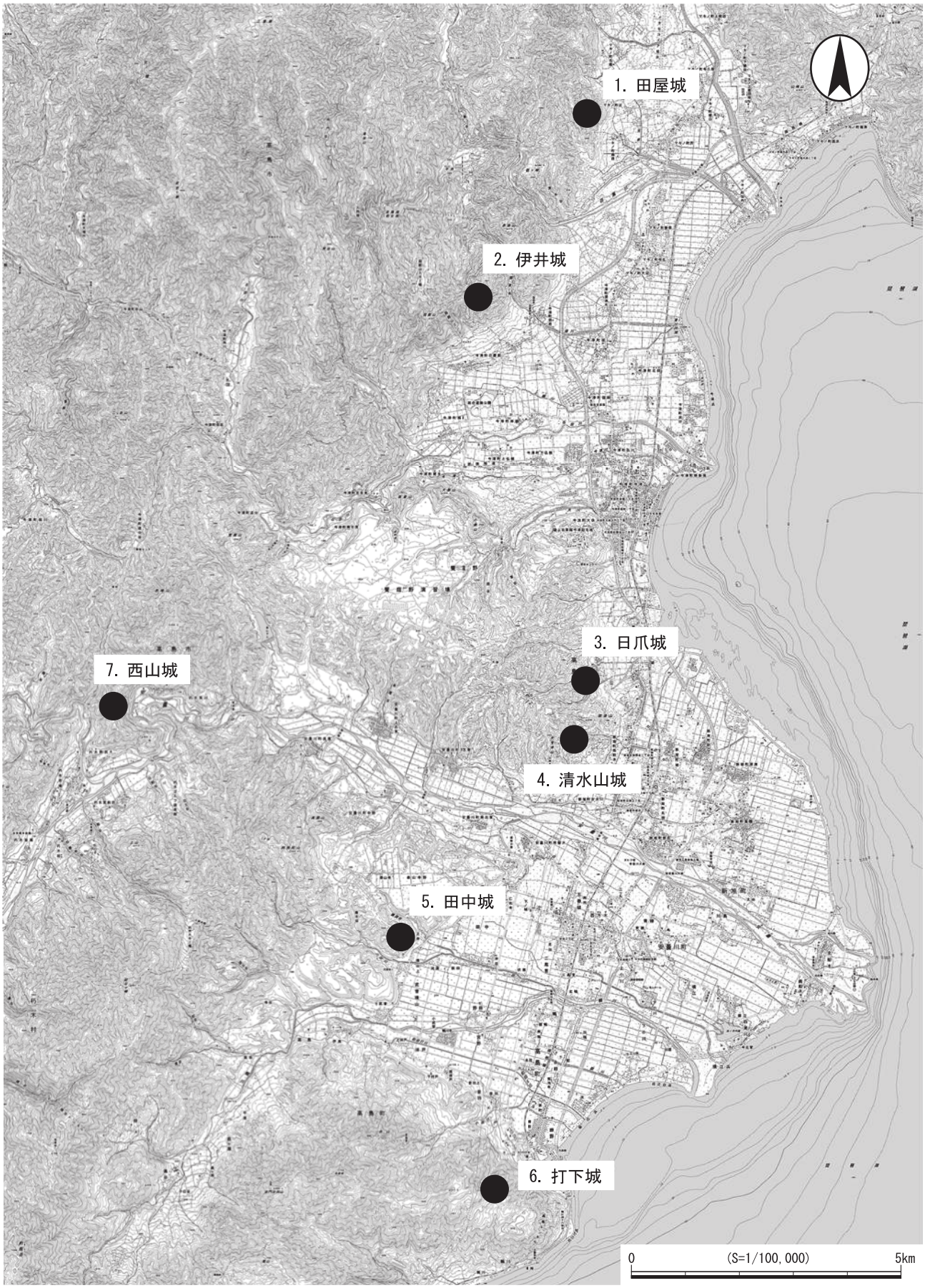

図１　高島郡の主な山城（S=1/100,000）

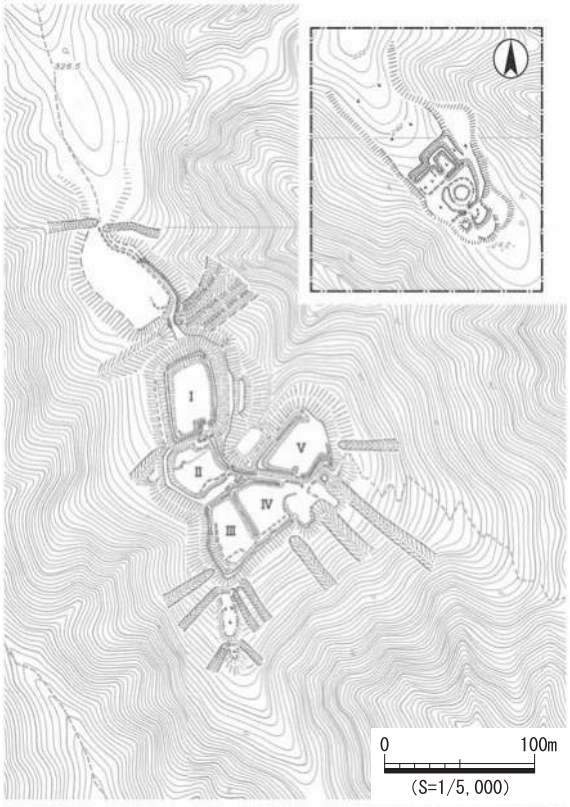

図２　田屋城概略図

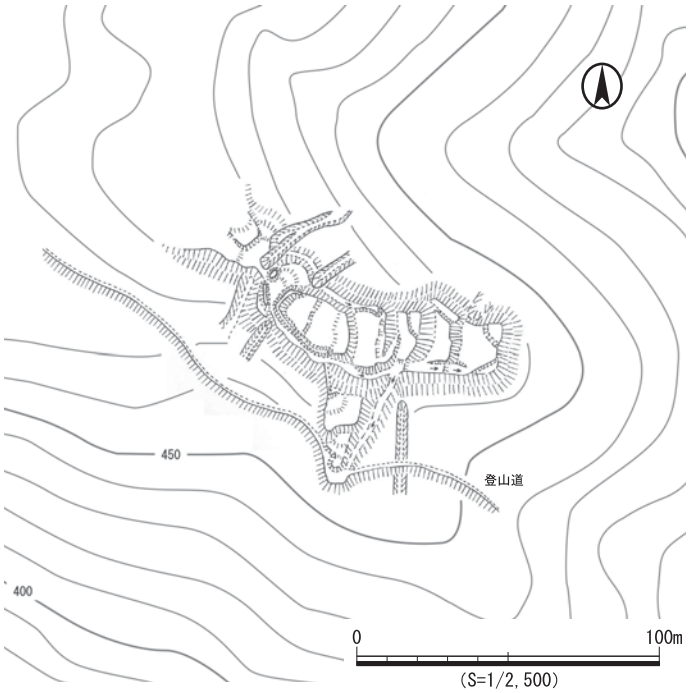

図３　伊井城概略図

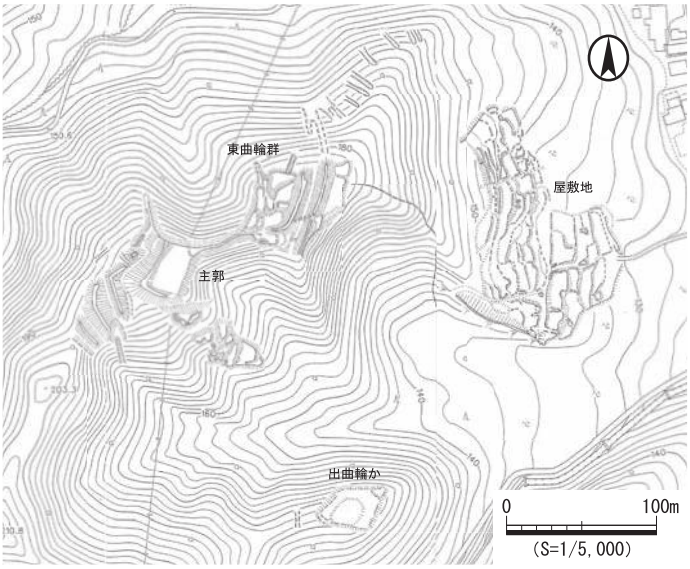

図４　日爪城概略図

図５　清水山城（中心部）概略図

「山城へ引退」したと記載されることから、この頃には田屋城が築かれていた可能性がある。なお、田屋氏の消息は、森西集落にある大處神社の天正３年（1575）の棟札銘を最後に途絶えている。田屋城は元亀争乱や賤ヶ岳合戦の際に改修が加わったとみられる。端的に言うと、竪堀や不完全な方形曲輪は田屋氏・浅井氏によるもの。ほぼ全周を囲繞する土塁や枡形虎口、「馬かけ場」の遺構などは、賤ヶ岳合戦の際に海津方面を防備した丹羽長秀によって改修されたものと評価されている(3)。

(2) 伊井城〔高島市今津町日置前〕（図３）

箱館山（標高690m）から派生する支尾根上に立地し、高島郡内にある城郭の中では最高所に築かれる。琵琶湖方面への眺望が利き、高島平野北部および対岸の長浜方面まで見渡すことができる。

城主については、『近江輿地志略』では「山中丹後守秀国」の名前が挙げられ、秀国は「高島七頭の一員なり、信長に亡ぼさる」と記載されている。しかし、高島七頭には山中姓を名乗る家はなく、遺構の状況も戦国時代末期まで時期が下がらない可能性が高いため、記載内容に疑問が残る。『朽木家古文書』には、長享元年（1487）に六角高頼が将軍足利義尚の近江遠征に備えて、北国街道（西近江路）を封鎖するため「江州高嶋郡河上」に「城郭」を築き、それに対処するため幕府が朽木貞綱らに攻めさせたとある。ここで六角氏により築かれた城郭のひとつが伊井城と推測されている。

城域は東西約80m×南北約20mと東西方向に細長く展開するいわゆる連郭式の縄張りで、大きく五段の曲輪が階段状に築かれる。各曲輪へは主に南辺が連絡路になっていたと考えられるが、虎口は存在しない。直線的で単純な縄張りとなっており、複雑な城郭構造を持たないのが特徴といえる。周囲には遺構が存在せず、立地のうえからも「詰の城」として機能していたと考えられる。伊井城はのちの改修が認められないことから、15世紀末頃の様相を残している事例といえる。

(3) 日爪城〔高島市新旭町饗庭〕（図４）

饗庭野台地の山腹に立地し、眼前には西近江路が通る。尾根上の小ピークに築かれた主郭とその東側の曲輪群が山城の中心となり、斜面部から山麓にかけては日爪城築城以前に存在した、「大慈寺」の寺坊跡に比定される平坦面を利用した曲輪群が残る。主郭の西側は４条の堀切と土塁により厳重に防御し、対する東曲輪群の東端は大規模な堀切によって遮断する。

永禄年間（1558～1569）に山門の代官であった吉武壱岐守の子息の西林坊・定林坊・宝光坊が饗庭の村々に分かれ住み、そのうち西林坊が日爪村にいたとされる。三氏は「饗庭三坊」と呼ばれ、それぞれが住んだ由来のある村には、発掘調査などにより山城や館の存在が確認されている。日爪城を含めた近隣の城郭と饗庭三坊との関係を考える資料として、『細川家文書』「明智光秀書状写」の元亀３年（1572）の記述に「饗庭三坊の城下まで放火し、敵城三ヵ所落去した」と記載される。

(4) 清水山城〔高島市新旭町熊野本・安井川〕（図５）

饗庭野台地の南東部にある丘陵上に立地する。饗庭野台地の南側には安曇川が流れ、東側には西近江路が通る要衝の地に位置している。標高約210mの山頂部にある主郭を中心に、三方向に派生する尾根上に曲輪を配置するいわゆる放射状連郭式の山城である。山腹や山麓周辺には、比叡山西塔末寺であった清水寺の寺坊跡を利用した屋敷地や、「御屋敷」・「犬馬場」といった地名とともに一町四方の方形区画が残るなど、およそ１km以上にわたって関連する遺跡群が広がる。

主郭からは高島郡の中南部一帯および琵琶湖の対岸まで一望することができる好位置に立地する。堀切や畝状空堀群によって尾根続きを各所で遮断し、各曲輪の要所に土塁を築くなど、防御性が高い構造となっている。一方で、主郭内などで発掘調査が行われており、六間×五間の大規模な礎石建物跡や多数の土器類や金属製品などが出土し、山上での居住空間を兼ね備えていたと考えられている(4)。出土した土器から16世紀第３四半期頃が中心となり、下限は信長による高島郡攻略の時期と一致する。城郭部分については、信長の侵攻による軍事的緊張の高まりに伴い改修が行われたことが指摘されているが、清水山城の周囲に広く展開していく関連遺跡群や空間構造は、戦国時代末までに形成された城下の景観を残している。

また、清水山城の南西山麓には佐々木氏の氏神を祀る大荒比古神社が鎮座し、隣接して土塁や堀によって区画された平坦面群が残る本堂谷遺跡（井ノ口館跡）が立地する。

(5) 田中城〔高島市安曇川町田中〕（図６）

高島平野南部の西方に広がる泰山寺野台地の先端部に立地する。主郭からは眼前に広がる高島平野南部と琵琶湖、さらには対岸にあたる湖東平野までの眺望が得られる。田中城は比叡山西塔末寺であった松蓋寺の跡地を利用して築城したとされる。尾根上に堀切や虎口をはじめとする城郭遺構が、斜面部には寺坊跡とみられる平坦面を利用した曲輪が数多く残る。

高島七頭の田中氏による築城とされ、平野部で確認されている平地居館の「下の城（田中氏館）」に対し、「上の城」とも呼ばれる。築城時期については、15世紀末頃から衰退傾向にあった松蓋寺に入れ替わるように侵出し、16世紀中頃には寺坊跡を再利用して田中城として改修・築城したと推測される。

文献史料からは、田中城は『信長公記』に三度登場する。

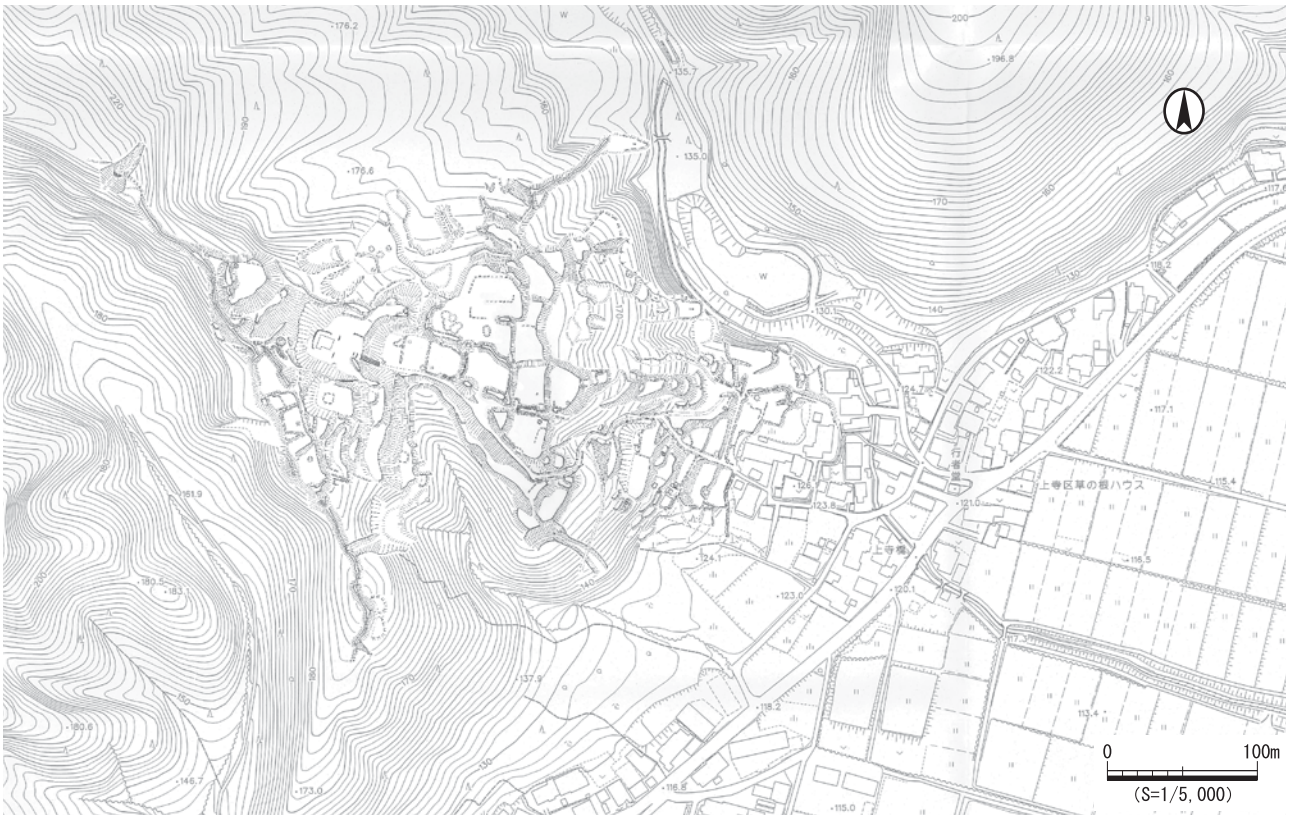

図６　田中城概略図

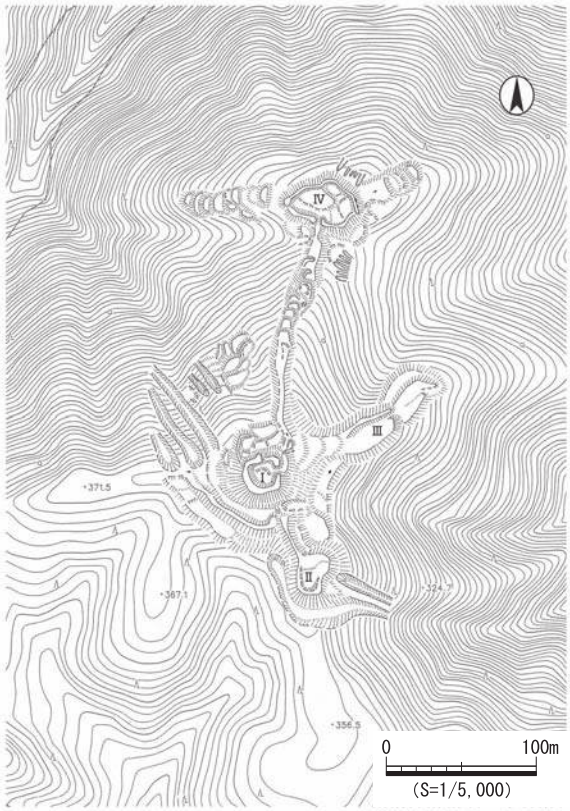

図７　打下城概略図

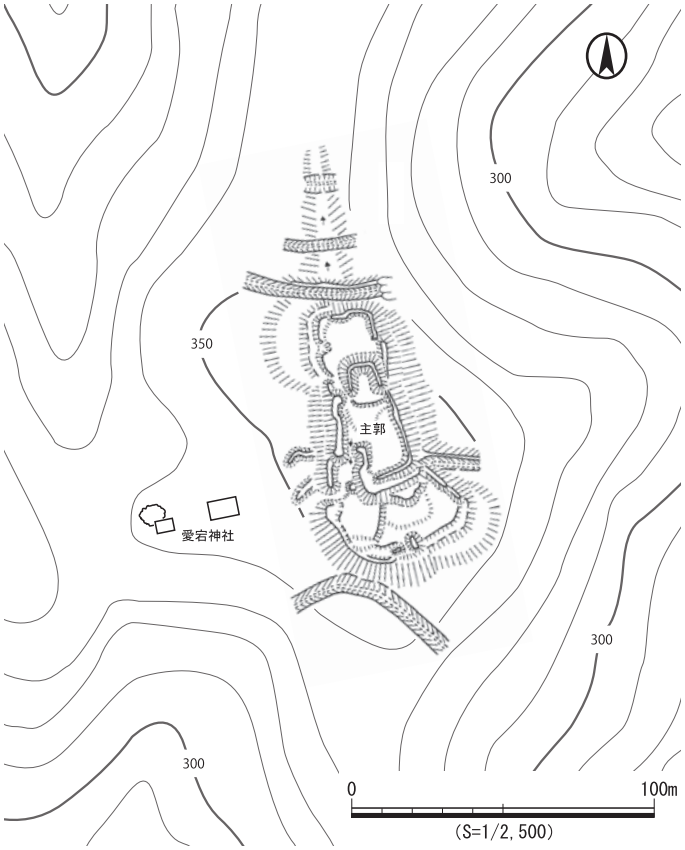

図８　西山城概略図

元亀元年（1570）に朝倉義景を討つために越前に向かった信長が、当時浅井氏の勢力下にあった田中城に逗留し、これより８日後に浅井氏の離反が起こっている。二度目は、元亀３年（1572）、志賀・高島郡の浅井・朝倉軍を攻めるために出陣したときのことで、明智・中川・丹羽の諸将に付城を設けて木戸・田中の両城を看視させている。三度目は、元亀４年（1573）に彦根松原において建造した大船で高島郡に攻め寄せ、「打下城」を陣所に木戸・田中両城を攻略するなど浅井方の勢力を掃討したとする。

(6) 打下城〔高島市勝野〕（図７）

比良山系北端部に位置し、山系が琵琶湖に迫り出す丘陵上に立地する。琵琶湖との間を西近江路が通過する、水陸交通の要衝の地となっている。標高約379mにある主郭を中心として派生する尾根上に曲輪を配置し、緩傾斜となる南西部を中心に大規模な堀切や横堀、畝状空堀群を設けるなど、厳重な防御施設が築かれている。

築城者については、土豪の林員清（與次左衛門）が永禄年間（1558～1569）に築城したと伝えられる。『信長公記』には、元亀３年（1572）、織田信長は敵対していた浅井・朝倉氏を攻める際、打下の林員清が明智光秀や堅田の猪飼野氏らとともに琵琶湖の湖上から湖北の浦々を焼き払ったとある。さらに、元亀４年（1573）には、高島郡の攻撃に成功した信長は、郡内の浅井氏が支配する領地を攻めるため、林員清の所（打下城か）に陣を据え、一帯の敵地に火を放った。林員清については、堅田衆らとともに琵琶湖水運の一部を握っていたと考えられ、当初は浅井氏に属していたが、この頃には信長方に属していたとみられる。

(7) 西山城〔高島市朽木市場・荒川・西山〕（図８）

西山城が所在する朽木（旧朽木村）は、ほぼ南北に流れる安曇川によって朽木谷が形成され、古くから若狭と京都を結ぶ街道として利用されている。この地を治めた朽木氏は、街道一帯と豊富な山林資源を押さえ、さらに京都に近い立地と軍事力から、室町幕府の奉公衆として重用されている。戦乱から逃れるために代々の足利将軍もたびたび朽木氏の元に身を寄せている。また、織田信長が越前の朝倉氏を攻める際、浅井長政の裏切りに遭い、若狭から朽木谷を通って京都への退却を先導したのが朽木元網であったことが知られる。その後、朽木氏は豊臣秀吉、徳川家康に仕え、江戸時代には九〇〇〇石を安堵されている。

西山城は、朽木氏の本城であった朽木城（朽木陣屋跡）に対する詰の城として築かれたと推測されているが、文献史料や江戸時代の地誌類にも全く記載がない。城の主体部は、中央の主郭と南北のそれぞれ一段低い位置に曲輪を設ける連郭式の構造である。小規模であるが前後を堀切で厳重に防御し、主郭部分には枡形虎口が設けられる。

築城年代は不明であるが、築城主体が朽木氏であることは確実である。朽木城の発掘調査などにより、朽木氏は15世紀には居館を朽木城に移したとみられ、朽木城を核として要所に詰めの城となる支城網が設置されたことが知られている(5)。このような動きの中で、西山城の築城が始まり、防御施設が徐々に整えられていったとみられる。

４．　築城の時期区分と城郭の様相（図９）

以上にみてきた山城には、いくつかの築城に至る契機となる出来事がある。その時期と、対象となる山城の動向について整理しておきたい。

第Ⅰ期　六角征伐【15世紀第４四半期】

現況から把握される高島の主な山城の中で、最も古い段階の事例は伊井城と考えられる。『朽木家古文書』には、長享元年（1487）の第一次六角征伐の際に、六角高頼が「江州高嶋郡河上」に「城郭」を築いたと記載される。この「城郭」の推定候補地は、伊井城以外にも山麓平野部の三谷城あるいは構城の可能性も考えられている。三谷城と構城は、地籍図や圃場整備以前の地形などから方形単郭の城館であったと推測される。特に構城では発掘調査により土塁基底部とその内外の堀が検出され、方形単郭の平地居館であったことを裏付けている。出土遺物は16世紀代の陶磁器などが少量ながら出土し、六角征伐に際して築かれた「城郭」と直接的にはつながらないが、以後も居館として使用されたことは想定できる。

伊井城についてみてみると、遺構は直線的で単純な曲輪配置となっており、堀切や竪堀は認められるものの、明確な土塁や工夫のある虎口も存在しない。山麓からはかなりの比高差がある立地と、城の周辺に手を加えた痕跡が認められない点からも、有事に備えた臨時的な築城であった可能性が高い。平地居館の三谷城や構城に対する詰めの城として伊井城が築かれ、その後も改修などはされることがなかったと考えられる。ただし、六角氏が足利義尚の近江遠征に備えた、北国街道の封鎖を目的として築城されたとすれば、逃げ込みなどの消極的な機能ではなく、遠方監視などの積極的な機能を期して築かれたことも考えられる。

15世紀第４四半期頃の山城の築城は、伊井城が単発的にみられるが、その構造は単純で臨時的な性格の強いものであったといえよう。

第Ⅱ期　浅井氏の高島進出～元亀争乱
【16世紀第３四半期】

六角征伐以降は築城契機となる大きな出来事はしばらくないが、その前後に朽木氏によって西山城などで詰めの城の築城に着手していた可能性がある。築城時期などの詳細は不明であるが、朽木城の発掘調査などにより、15世紀には本拠を朽木城に移し、付近の要所に支城網を設置している。西山城に残る現況の城郭構造から元亀年間頃に大幅に改変が加えられたとみられるが、外部の有力者との関係が変化するにつれて室町幕府や浅井氏、織田氏などの影響を

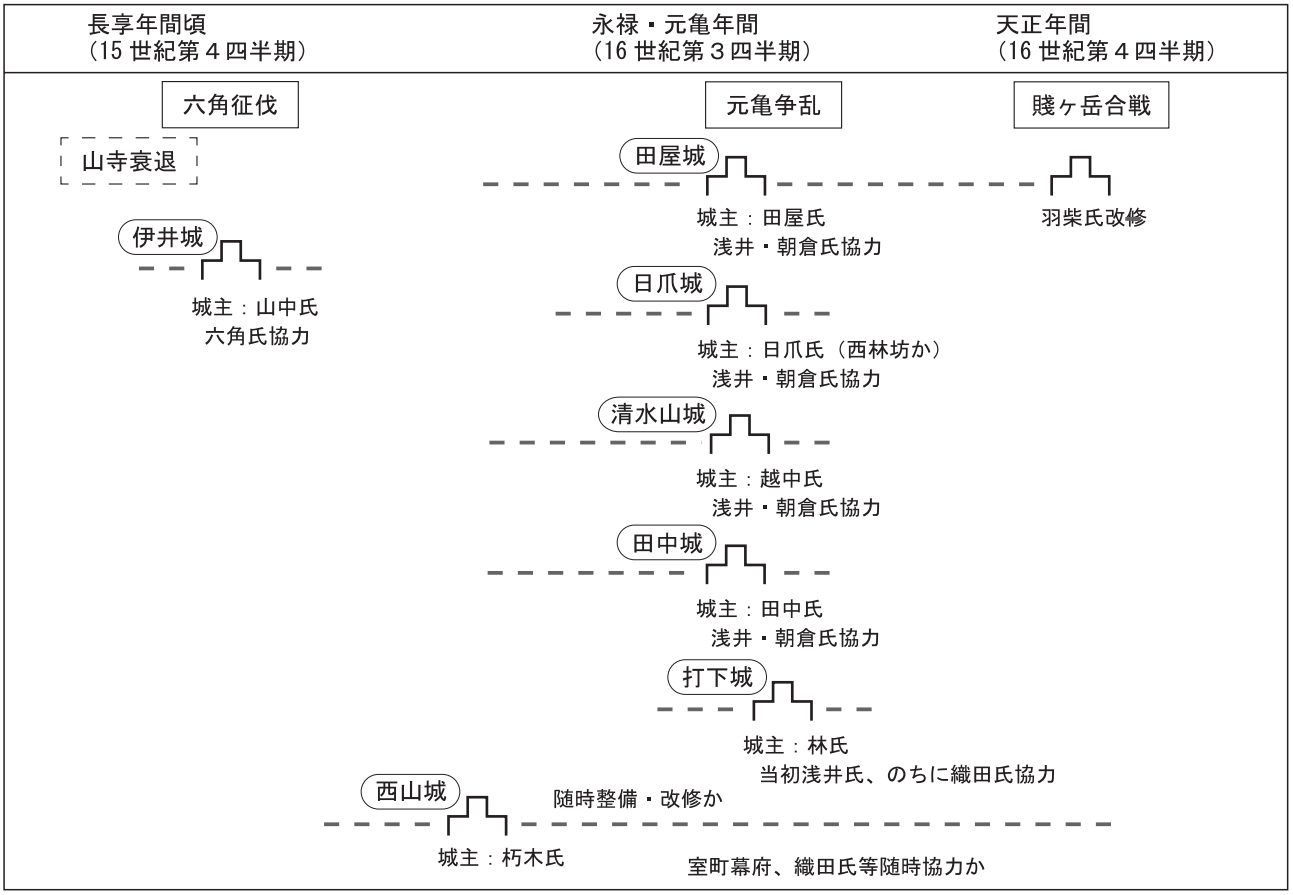

図９　高島郡主要山城の消長模式図

受けながら、徐々に整備・改修が加えられていったと推測される。

一方、寺社勢力の動向をみると、15世紀後半頃からはそれまで延暦寺を後ろ盾として荘園支配等により権勢を振るった山寺に寺坊の売券がみられるなど、天台系寺院に衰退の傾向がみられる。これに入れ替わり、高島郡では浄土真宗の寺院建立や天台宗からの転宗が相次いでいる。

16世紀中頃からは山城の築城の動きが一挙に活発になっていく。永禄年間頃には台頭してきた浅井氏の影響が強まり、高島七頭の越中氏や田中氏などと同盟関係を結んでいる。清水山城や田中城では、山麓から山腹に築かれていた清水寺あるいは松蓋寺といった山寺の寺坊跡を改修して屋敷地とし、背後の尾根上に城郭施設を築いていく。そのあり方は前身遺構を否定することなく、うまく利用するかたちで取り込んでおり、立地や造成にかかる手間の省略などの山城が必要とする諸条件を既に山寺が備えていたためと考えられる。清水山城では防御施設だけでなく、山上に居住空間を兼ね備えた館を築き、山麓城下の整備も進められるなど、山城を中心に各機能が総合的に集約されていく。

また、在地土豪の城である田屋城、日爪城、打下城もこの頃に築城が進められたとみられる。日爪城は清水山城のように防御施設以外の城下的機能が形成されている状況ではないが、山腹の山寺の遺構がある部分は「ねごや」と呼ばれ、屋敷地として利用されたと考えられる。また、背後の尾根上に厳重な防御施設を築いている。田屋城や打下城については遺構が防御施設に特化しているが、普請の規模からこの頃には本格的に築城が始まっていたと推測される。永禄年間の築城の動きは、その土木量が大規模なものであり、この時期の高島郡に影響を強めていた浅井氏あるいは朝倉氏といった大名クラスの支援・協力のもとで進められていったと考えられる。

こうした高島郡の山城築城の動きがピークに達するのが、浅井氏が織田信長に離反し、信長が本格的に近江に侵攻する元亀争乱の時期である。『信長公記』や『細川家文書』などの記載から、高島七頭や饗庭三坊、田屋氏は信長と敵対して浅井氏と協力関係にあったとみられ、対信長の山城として清水山城、田中城、日爪城、田屋城は厳重な防御施設が整えられていったと考えられる。これに対して、打下城の林氏や西山城の朽木氏は信長に恭順し、高島郡を平定するための拠点として整備が進められたとみられる。各山城の現況に残る城郭遺構の大半が、この時期に形成されたものといえる。

第Ⅲ期　賤ヶ岳合戦【16世紀第４四半期】

元亀４年（1573）に信長により高島郡は攻略され、新旭町にある新庄城、さらには打下城の麓に築かれる大溝城を織田氏の新たな拠点城郭として高島郡が平定されていく。

これにより高島郡内の軍事的緊張は緩和されていくわけであるが、高島郡北部を中心に、再び軍事的緊張が波及してくるのが賤ヶ岳合戦である。

天正11年（1583）に起こる賤ヶ岳合戦の主戦場は伊香郡の余呉湖・賤ヶ岳周辺であるが、羽柴方の丹羽長秀が海津方面を防備している。田屋城ではこの段階に改修が行われた可能性が高い遺構が存在している。田屋城主体部に対面する尾根上にある「馬かけ場」の遺構は、クランク状の土塁と横堀によって囲まれ、明確に横矢が掛かる構造となっている。尾根続きは緩斜面地であり、兵の駐屯空間としての利用が想定される。このような特徴から、丹羽氏によって出曲輪として築かれた可能性が高い。また、主体部の各曲輪は高さ約0.5～3mの土塁でほぼ全周が囲まれ、主郭には枡形虎口が築かれる。南東面では３条の竪堀に挟まれる２か所の張り出し部があり、横矢掛けとなっている。

朽木氏の西山城では、主郭の南西部分に枡形虎口が形成されており、この時期に改修が行われていた可能性がある。改修が想定される田屋城や西山城は、かなり発達した前身遺構が元亀年間頃までに築かれており、そこに技巧的な構造を付け加えて改修されたと考えられる。改修も一部に留まることから、既に大幅な梃入れをする必要のない状態の山城となっていたと推測される。

５．　築城の背景

前章で見てきたように、高島郡での築城は15世紀第４四半期頃に単発的な築城の動きがみられ、その後、16世紀第３四半期に集中的に築城が進められる。高島郡をめぐる動乱が終息する元亀４年以降は、いくつかの山城で部分的な改修が行われるに留まる。

15世紀第４四半期頃は、高島七頭が同名中を形成し、連合して地域支配にあたっていた時期であり、惣領家の越中氏や田中氏、朽木氏は室町幕府との関係をさらに強めている。その一方で、高島七頭や幕府とは一線を画して、在地土豪が湖上交通に関与、あるいは外部の有力者や寺社勢力などと連携して独自の勢力を保っていく動きがみられる。伊井城の築城は六角氏の主導による単発的なものと考えられ、文献史料などからも高島郡で直接的な戦闘行為が頻発する状況にはなかったと推測される。それぞれが平地居館を構えていたことは想定されるが、特別に山城を築く必要性がなかったと考えられる。16世紀第３四半期に至るまで、外部の有力者と在地有力者との関係と、そのバランスが変化しながらも、各勢力が温存されていったと考えられる。

16世紀第３四半期は台頭してきた浅井氏が高島郡に進出し、一部は浅井氏と手を結んでいく。この地でも軍事的な緊張が徐々に高まっていったとみられ、築城の動きが活発化する。高島七頭の越中氏や田中氏は、山腹に存在していた山寺の遺構を取り込み、その背後の尾根上に山城を築く。越中氏の清水山城では城下を含めた山城の整備拡充が進められている。高島七頭は幕府や将軍と結びつくことによって勢力を保持し、高島郡で有数の権力や軍事力を誇っていたが、単独で大名クラスへと成り得るレベルではなかった。あるいはそれを望んでいなかったのかもしれないが、同名中として結束することで支配力を高め、一部が突出することはなかった。このような分散された権力構造であったため、山城が高島七頭のほか、在地土豪によっても同時多発的に築城されていったと考えられる。しかし、この時期に築かれる山城の構築にかかる土木量は大きく、同盟関係にあった浅井氏などの協力がなければここまでの普請を行うことはできなかったのではないかと推測される。高島七頭以外の在地土豪についても、田屋氏や饗庭三坊などが浅井氏との協力もしくは付き従う関係にある。

浅井氏が高島郡に進出してきた永禄年間頃を中心に、近隣諸国での軍事的緊張の高まりに伴い徐々に築城が進められていたところ、元亀元年の浅井氏の離反によって、対織田信長の備えとして郡内で築城の動きが一気にピークに達したと考えられる。一部では早々に織田方に鞍替えをして、打下城のように高島郡侵攻の拠点へと変貌しているものもある。その後の賤ヶ岳合戦における田屋城の改修にしても、丹羽氏という外部の手によるものであり、高島郡での築城の動きは、在地勢力による内部からの自発的なものではなく、外的要因によって進められたといえよう。

６．　おわりに

本稿では高島郡内の主要な山城を検討対象として、その築城画期と要因について検討してきた。築城の要因となるのは「戦」への備えであり、その画期が高島郡では３度あった。そして、高島郡における特徴は、郡内の権力が分散支配している構造であるため、築城の動きは同時多発的な状況となり、いずれも外的要因によって推し進められたと考えられる。

現地に残る遺構を主たる検討材料としつつも、地表面観察の結果という性格上、文献史料等の成果に頼る部分が大きく、検討方法が曖昧となっている点は否めない。また、本稿で抽出した山城に関わる部分に限って平地城館や在地有力者について触れているため、実際は本稿で論じていない遺跡や有力者が少なからず存在している。触れられていない課題も多いが、稿を改めて考えるとしたい。

註

(1)各沿革等については文献一覧で提示する著書にある記載を参照して解釈し、再構成した。

(2)小林（2014）で言及している。

(3)城郭談話会編（2014）の「田屋城」において、早川圭氏が指摘している。

(4)高島市教育委員会（2006A）などで指摘がある。

(5)高島市（2010）で指摘がある。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）
宇野健一（註訂）（1976）『新註 近江輿地志略 全』、弘文堂書店
桑田忠親（校注）（1965）『改訂 信長公記』、新人物往来社
小林裕季（2014）「湖西地域における山寺の城郭化」『紀要』第27号、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県教育委員会（1991）『滋賀県中世城郭分布調査８（高島郡の城）』
城郭談話会編（2014）『図解　近畿の城郭Ⅰ』、戎光祥出版
城郭談話会編（2015）『図解　近畿の城郭Ⅱ』、戎光祥出版
城郭談話会編（2016）『図解　近畿の城郭Ⅲ』、戎光祥出版
新旭町教育委員会（2002）『織田信長と謎の清水山城―近江・高嶋郡をめぐる攻防―』記録集、サンライズ出版
新旭町教育委員会（2003）『清水山城郭群確認調査報告書』
千田嘉博（2000）『織豊期城郭の形成』、東京大学出版会
高島市（2010）『朽木村史（通史編）』、朽木村史編さん委員会編
高島市教育委員会（2005）『高島の城と城下～城・道・港～』高島歴史探訪ガイドマップ１
高島市教育委員会（2006Ａ）『清水山城館跡現況調査報告書』Ⅰ-Ⅳ
高島市教育委員会（2006Ｂ）『高島の山城と北陸道―城下の景観―』記録集、サンライズ出版
高島市教育委員会（2008）『高島市内遺跡調査報告書―平成19年度―』
中井均編（2006）『近江の山城ベスト50を歩く』、サンライズ出版
西島太郎（2006）『戦国期室町幕府と在地領主』、八木書店

挿図典拠
図１　国土地理院1/25,000地形図「海津」・「熊川」・「今津」・「饗庭野」・「勝野」・「北小松」に拠り、小林が作成。
図２～８　小林が踏査・作図。
図９　小林が作成。

（こばやし　ゆうき：調査課　技師）

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S.S)

紀要　第30号

刊行年月日：平成29年（2017）３月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 ／ (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

http://www.shiga-bunkazai.jp/

印刷・製本：三星商事印刷株式会社